

Pinyo

動臨研 野生動物ニュースレター Vol.42



Contents

- ▶ コウノトリの野生復帰 松本 令以
- ▶ 猛禽類最強のイヌワシ 徳山亜希子
- ▶ 野生鳥獣保護管理基金へのご協力をお願い 編集部だより

コウノトリの野生復帰



兵庫県立コウノトリの郷公園

獣医師 松本令以

●コウノトリの絶滅と飼育下での繁殖

コウノトリは、環境省のレッドリストで絶滅危惧IA類に分類されるとともに、文化財保護法で国の特別天然記念物に指定されて保護されています。明治時代になってからの狩猟、営巣木となるような大きな松の木の伐採、有機水銀を含む農薬の使用、人為的要因による事故などが原因となって個体数が減少していったと考えられています。国内のコウノトリの最後の繁殖地の一つである兵庫県では、1955年にコウノトリ保護協賛会が設立され、コウノトリを保護する取り組みが始まりました。飼育施設で繁殖させるため当時残っていた個体が捕獲されましたが、繁殖には至りませんでした。そしてついに1971年、最後の野生個体がケガのため救護されたことにより、コウノトリの国内個体群は野生から姿を消してしまいました。兵庫県では、1985年にロシア・ハバロフスク地方からコウノトリを輸入し、繁殖させたコウノトリを野外に戻すことを目指してきました。1988年に東京の多摩動物公園が国内で初めてコウノトリの飼育下繁殖に成功したのに続き、兵庫県でも1989年に繁殖に成功しました。以来、毎年飼育下での繁殖に成功し、1999年には、野生復帰に取り組む拠点施設として「兵庫県立コウノトリの郷公園」が開園しました。

●放鳥

飼育施設や動物園で飼育下繁殖された個体を用いて、2005年、野外へのコウノトリの放鳥が始まりました。2007年には雛が兵庫県豊岡市内の人工巣塔で孵化し、以降、放鳥と野外での継続的な繁殖により、次第に個体数は増えていきました。2015年からは福井県や野田市（千葉県）でも放鳥が行われており、2023年までに兵庫県、福井県、野田市（千葉県）で計89羽が放鳥されてきました。一方、国内では19施設で192羽のコウノトリが飼育されており（2022年7月末時点）、これらの施設が協力しながら飼育下繁殖に取り組んでいます。このよう

な飼育下繁殖や放鳥は、「コウノトリの個体群管理に関する機関・施設間パネル（IPPM-OWS）」が毎年策定する飼育下繁殖計画や放鳥計画に基づいて行われています。放鳥される個体は、国内の野外コウノトリの遺伝的な多様性を考慮して選ばれているのです。

●全国での繁殖状況

繁殖地は、兵庫県以外にも次第に広がり、2012年に京都府、2017年に徳島県と島根県でも雛が孵化しています。2023年には、栃木県、茨城県、石川県、福井県、京都府、兵庫県、鳥取県、島根県、広島県、徳島県、香川県、佐賀県の計12府県22市町でコウノトリの巣立ちが確認されました。このほか新潟県や岡山県でも巣造りが確認されています。国内のすべての放鳥個体と、ほぼすべての野外巣立ち個体には個体識別のための足環が装着されており（図1）、市民から寄せられる目撃情報により、国内の野外個体数は2017年に100羽、2020年に200羽を超え、2023年12月末時点で371羽まで増加していることが把握されています。

●鳥取県内での繁殖

動物臨床医学研究所がある鳥取県内では、これまでに、鳥取市、八頭町、北栄町の3か所でコウノトリが繁殖しています。鳥取県と3市町の担当部局が市民や町民らの協力を得ながらコウノトリの観察や調査を行っており、兵庫県立コウノトリの郷公園も必要な支援や助言を行っています。

鳥取市内では2019年に市内の電波塔で初めてコウノトリの繁殖が確認され、4羽が巣立っていきました。巣立った個体の一部は、その後、遠く韓国に飛来したことも確認されました。2020年からは、市内に設置された人工巣塔で繁殖が継続しています。また、北栄町では、2022年に電波塔で、2023年には電柱で繁殖が確認されており、八頭町では、2022年に電波塔で、2023年には人工巣塔で繁殖

が確認されています。これらの3市町の巣から、これまでに23羽が巣立っていきました。

●新たな課題

順調に野外個体数が増えている一方で、電柱や送電線鉄塔での巣造り、近親婚によるペアの形成、人為的な要因による事故の増加など、新たな課題も生じています。

兵庫県内でコウノトリが負傷して発見された場合は、兵庫県立コウノトリの郷公園に收容し、治療して野生に帰すとともに、回収された死体の病理解剖や死亡現場の現場検証等を行い、救護・死亡原因を分析して様々な事故防止対策を提案しています(図2)。また、兵庫県外の事例についても、助言や支援、データの収集と分析を行っています。コウノトリが負傷したり死亡したりする事故のうちおよそ半数が、獣害対策用ネットに絡まる(図3)、電線に衝突する、送電線鉄塔で感電死する、交通事故・鉄道事故にあう、トラバサミにかかる、銃であやまって撃たれる、プラスチックごみを誤食するといった人為的な要因によるものであることがわかってきています。

コウノトリの野外個体数が増えるに従い、これらの事故は各地で発生していくことが危惧されます。このような事故の原因を分析し再発防止につなげていく取り組みが必要になってきています。

●コウノトリと共生するための三つの柱

コウノトリが持続的・安定的に繁殖し、人とコウノトリが共生できる地域社会をつくっていくことを目指して、「営巣環境の整備(人工巣塔の設置、電線の迂回工事など)」、「採餌環境の整備(環境保全型農業の拡大、湿地の再生など)」などの取り組みが各地で行なわれています。しかし、これら二つの取り組みだけでは十分ではありません。「安全な環境の整備」として、特に繁殖地の周辺では、人工物による事故への対策にも、関係者が協力しながら取り組んでいくことが重要です。

「ワンヘルス」という言葉があります。これは、人の健康、動物の健康、自然環境の健康(健全性)は密接に関連しており、人と動物の共生に関する取り組みや人と動物の共通感染症対策などについて、医療関係者、獣医療関係者、行政関係者、研究者、市民らが連携して取り組んでいこうという理念です。コウノトリも住める豊かな自然環境を取り戻し、人にとって安全安心な農作物づくりを進め、コウノトリが人工物による事故になるべくあわないように対策に取り組む。コウノトリの野生復帰は、まさに

「ワンヘルス」の理念を実践する取り組みと言えるでしょう。

近年、コウノトリの個体数が増えて全国に飛来し、兵庫県外でもコウノトリの巣づくりが観察されることが増えてきました。このため、兵庫県立コウノトリの郷公園とIPPM-OWSでは、「あなたのまちでコウノトリが巣づくりをはじめたら」というリーフレットを作成し、兵庫県立コウノトリの郷公園のホームページで公開しています。みなさんのまちでコウノトリの巣づくりが始まった場合には、ぜひ参考にしてください。

【参考資料】

- ・あなたのまちでコウノトリが巣づくりを始めたら
https://satokouen.jp/downloads/ows_fly_breed.pdf



図1 コウノトリの親鳥と雛(兵庫県豊岡市)



図2 コウノトリへの注意をうながす道路標識(兵庫県朝来市)



図3 防獣ネットに絡まって負傷したコウノトリの救護

猛禽類最強のイヌワシ



倉吉動物医療センター・山根動物病院

愛玩動物看護師 徳山亜希子

傷病野生鳥獣の保護施設に指定されている当院に搬入された猛禽類はトビやフクロウが最も多く、次いでハイタカ、ハヤブサ、チョウゲンボウ、オオタカ、サシバなどで、イヌワシの搬入は私が知る限り今回が初めてでした。私は搬入されたイヌワシの姿を見てまずその大きさに驚きました。私たちが普段からよく目にするトビの全長が約 59～69cm、翼開長約 150～160cm に対して、イヌワシは全長約 81～89cm、翼開長約 168～213cm、なので、ひとまわりくらいは違います。もちろん嘴も鋭く、爪も大きく目を見張るものがありました。またイヌワシは絶滅危惧 IB 類 (EN)、国の天然記念物に指定されていて鳥取県内でも確認されているペアが数組と、ほとんど見ることがない貴重な猛禽類です。野ウサギやヤマドリ、蛇などを主な食料としていますが、鹿の幼獣やテンなども捕食するとされています。また、体重（約 2.5kg～5kg）の約半分が筋肉で、特に獲物を捕らえるための脚の筋肉が発達していて、なんと握力は約 100kg ともいわれています。人の握力の平均が、男性で 40kg 台なのでそれと比べても凄い力です。また、大きくて湾曲した爪は「鉤爪」（かぎづめ）と呼ばれ、獲物を突き刺しながら掴むのに適した構造となっています。猛禽類の中でも最強と言われている所以に少し怖い感じもしましたが、そのイヌワシを身近にみることは貴重な体験となりました。

保護場所は鳥取県東部に位置する八頭郡。道路脇に飛べない猛禽類がいるとの通報があり鳥取県により収容されて、鳥取市内の動物病院へ搬入されました。その後、胸部腫脹の症状や、元気の回復が見られたため放鳥を試みるが不安定だったため当院に搬

入となりました（写真 1）。獣医師による診察とレントゲン検査等により、明らかな著変がなかったため投薬等無しで経過観察をすることになりました（写真 2、3）。ここから私たちの出番となり、毎日の給餌等のお世話が始まりました。搬入時の体重は、3.01kg でした。当日はケージ内に鶏肉を置いておくことにしました。

2 日目 ケージ内を覗くと元気あり！（写真 4）しかし、前日の置き餌（鶏肉）を食べた形跡はありませんでした。そのため、大きめのタオルや毛布を使ってイヌワシを包み込み、気を付けながら強制給餌（鶏肉、冷凍ひよこ）を行うことになりました。給餌量は、450g/day 体重の 15% を目標としました。

5 日目 強制給餌を継続していましたが、この日の朝初めて自分から食べ始めました。夕方鶏肉を口元に持っていくと自ら食べるようになりました。

6 日目 器に入れた鶏肉を自分から食べていました。状態が少し落ち着いてきたので、搬入時に糞により汚れていた翼の洗浄を行いました（写真 5）。体重は 3.5kg に増えていました。

7 日目 鶏肉に加え鹿肉を与え始めました。強制給餌の時は細かく刻んで与えていた肉も塊のまま与えたり、種類を増やしたりしてより自然に近づけるようにしてみました。

9 日目 鹿肉のブロックを食べ始めるが残っていたため、扉に目隠しのために毛布を掛けて様子を見てみるようになりました。後で確認すると食べていました。

13 日目 鹿肉の置き餌を昼前になっても食べる様子がないので口元に持っていくと食べ始めました。翌日も置き餌では食べなかったため、口元に持つ

ていって与えました。

15日目 昨夜の置き餌を完食し、鹿肉・鶏肉も自ら食べていました。体重は3.74kgと順調に増えていました。

18日目 鹿肉の骨付きを与えるるとすぐに掴んで食べ始めました!!

19日目 朝から様子を見るが、止まり木に止まらず脚が痛いのか?心配になりました。そのため脚に負担の少ないようにスタッフで試行錯誤しながら止まり木に人工芝を巻いて、床も同様にして様子を見ることにしました。さらに翌日、新しく止まり木を作って入れてみるとしばらくして止まっていました。気に入ってくれたのでしょうか? 私たちも嬉しくなりました。鹿肉の骨付きも完食していました。その後、経過は良好でしたが、当院では広いフライングケージがなく十分な飛行訓練ができないため、

イヌワシの保護施設に協力をして頂くことになりました。

23日目 元気あり。移動予定のため前日より絶食をしていました。午後、関西地方にあるイヌワシの保護施設の方と鳥取県の担当者の方が来院されて、搬送の準備をしました。リハビリを経ていつかまた故郷の空を自由に飛べるようになることを心から願ってみんなで送り出しました。

猛禽類はイヌワシをはじめ個体数が年々減少しています。原因は大規模な開発等による適切な生息環境の減少、汚染物質の蓄積による繁殖率の低下など様々ですが、私たち人間も係わる大きな問題です。普段忘れがちな自然保護や共生について再度考える機会を与えてくれたイヌワシに感謝し、傷病野生鳥獣保護に係わる者として啓蒙活動など今後も努力していきたいと思います。



写真1 搬入時の様子



写真2 羽のチェック



写真3 レントゲン検査



写真4 止まり木に止まっている様子



写真5 汚れた翼を洗浄

2023年12月1日から2024年2月29日までに野生鳥獣保護管理基金にお寄せいただきました総額は、80,000円でした。ご協力頂きました皆様に心よりお礼申し上げます。

野生鳥獣保護管理基金に御協力お願い致します

近年、人間活動が野生動物の領域にまで広がる一方で、里山の崩壊や気候変動、在来種の増加など、人と野生動物において様々な問題が生じています。

野生どうぶつ友の会は、絶滅危惧種を含む疾病野生動物を再び野生に戻す活動を通じて、命の大切さや動物愛護思想の普及を図っております。

当方の活動は、まだまだ微力ではございますが、長期にわたり続けて参ります。今後とも、御理解御協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

<基金送付先>

郵便振込：口座番号 01430-6-14893

口座名：公益財団法人動物臨床医学研究所 野生鳥獣保護管理基金

《表紙の動物》トビ

表紙の写真の鳥は猛禽類のトビです。数年前に、島根県にある海を見下ろす位置にある、道の駅で撮影したものです。島根の山間にある有名な桜のスポットに行った帰りに立ち寄りました。綺麗に桜が咲いていて、山陰には珍しく、スカッと晴れた青空でした。ここには看板が立っていて、「トビに食べ物を取られないように注意」と書いてありました。どうもこの場所は、トビたちにとって格好の狩場になっているようでした。確かに空にはトビが何羽か飛んでいました。青空をバックに桜とトビの写真が撮れないか試みてみました。思い描いた構図にはなりませんでした。一応、トビと桜の写真が撮れました。

公益財団法人 動物臨床医学研究所
獣医師 水谷雄一郎

編集部だより

今回はコウノトリの郷公園の松本先生に寄稿をお願いしました。私は、増井光子先生が園長の時代、この公園を訪ねたことがあります。増井先生に園の取り組みの説明を受け、園内をご案内頂いたことがあります。当時、園内のコウノトリの飼育羽数が98羽となり、あと2羽で100羽、放鳥できると増井先生が笑顔で話されていたことを昨日のことのように覚えています。それから20年ほど経ち、ここ倉吉でもコウノトリが目撃されるようになりました。コウノトリの郷公園さんの素晴らしい取り組みが絶滅したコウノトリの復活につながりました。個人的にも非常に感慨深いです。

そして、当財団にイヌワシが搬入されました。天然記念物に指定されています。搬入時にはずいぶん弱り、羽が痛んでいたのですが、何とか回復してくれたため、リハビリのために専門の施設に移動と

なりました。骨折などもなかったため潜在的な疾患がある可能性もあったのですが、24時間モニターにより痙攣症状などが観察されました。今もリハビリ中とのことですが、野生復帰できることを祈念してやみません。

公益財団法人 動物臨床医学研究所
副理事長(常務理事・所長) 高島一昭

.....
公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会
〒682-0025 鳥取県倉吉市八屋 214-10
Tel 0858-26-0851 / Fax 0858-26-2158
E-mail dorinken@apionet.or.jp
URL <https://dourinken.com>
<https://d-wildlife.jp.org/>
.....

ニュースレター「Pinyo」Vol.42 (2024年3月)
発行：公益財団法人 動物臨床医学研究所 野生どうぶつ友の会